

ムラの夏祭り―皆でわいわい、後継者も育成―

山形県の内陸山間地にある角川の里は8月に入ってから猛暑が続いた。農家の人々は暑さに辟易しながらも、冷害のないことを喜び、稲の生育が順調なことに安堵感を覚えている。

そんな暑い盛りのお盆の頃、角川の里では豊作を祈願する夏祭りが14の集落ごとに行われる。8月14日から19日まで毎晩どこかの集落(ムラ)でお祭りをしているというにぎやかさである。今回はムラの夏祭りの中で、初めから終わりまで参加したある集落のお祭りを紹介してみたい。

東沢お観音祭りは、この地域の観音講の拠り所となっている子安観音のお祭りである。観音講とは集落ごとに女性たちが月に1回、公民館などに集まってご詠歌をあげる集いのこと。ご詠歌をあげた後は、持ち寄りのご馳走とお酒で宴会となり、女性たちの情報交換と親睦の場でもある。その本山が東沢の集落にある子安観音だ。

そのお堂前の階段を降りた所に大きな広場があり、広場を挟んで観音様に相對する格好で東沢の公民館がある。この公民館は建物の片側の柱がすべて取り外せるようになっている。建物自体が特設野外ステージとなっているわけだ。ここが祭り当日の歌、踊り、素人演芸、バンドの舞台となるのである。

出し物は必ずしも伝統的なものに限らない。祭りは一カ月前から、地域の中学生からじいちゃん、ばあちゃんたちまで動員して準備が始まる。まずは集落会合。中心は40～60代の面々だが、祭りを盛り上げようと各世代が希望する出し物にはジャンルを超えて寛大だ。今年は、伝統的な素人演芸や日本舞踊に加えて、中高校生らによる新作の太鼓が奉納されたし、中国から来ている朝鮮族のお嫁さんのチマチョゴリの衣装と村の防火協力婦人班の合同の中国舞踊や地元の青少年たちのバンド演奏(筆者もメンバーの一人として参加)もあった。

祭りは早朝から始まる。若者たちは神楽で家々を1日かけて回る。大人たちは公民館の舞台設定や屋根掛け作業などの準備をして夕方いったん家に戻る。親戚や来客の接待を行いつつ、また夜、公民館に集って、出し物を奉納するのである。すべて住民による手作り。当日は出店も出るのだが、ビールやお酒の販売や焼き鳥屋さん、焼きそば屋さんまで、中高校生がお手伝いをしていた。祭りの実行委員長さんは「ここでは、中学生からお年寄りまでが実行委員、いろんな立場の人がいるけど、それぞれが主役。だから、みんなでわいわいやるんだ。そしてそのことが、結果として後継者を育成していくことにつながるんだね」と話す。

さて、祭りの翌日、集落住民はもう一度集まる。今度は祭りの反省会だ。会場の撤収作業を皆で終えた後、集落の住民と協力者が集って歓談する。里山に囲まれたこの地域ならではの炭焼きのバーベキューや郷土料理を囲み、地酒やジュースを飲みながら、その中で来年のお祭りや集落運営のあり方などについて自然と論点が定まったり、話がま

とまっていく。住民同士の絆が深まっていくのである。

このように、角川の里の村々のお祭りは展開していく。確かに祭りは一過性のイベントだ。しかしそれは、地域住民のお互い顔の見える関係の紐帯を確かなものにし、地域の方向性を定め、また地域の子どもたちを育てる機能を持っている。大都市で行われる祭りのような派手な場面はないかもしれないが、角川の里のお祭りは、ムラの住民による手作りの、ささやかだが心のこもった温かいフェスティバルなのである。様々な試練に立たされながらもこうした祭りが維持されている限りムラは健全だと思うのである。